OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	接尾辞「上（じょう）」を後要素とする語の機能 ：機能の移行と移行の条件について
Author(s)	張, 希西
Citation	大阪大学言語文化学. 2019, 28, p. 57-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72858
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

接尾辞「上（じょう）」を後要素とする語の機能

―機能の移行と移行の条件について―*

張　希西**

キーワード：接尾辞、句の包摂、接続詞的用法

本文对以接尾辞“上（じょう）”为构词要素的词“－上”进行了考察，记述并分析了其在句子中或者文中的作用，以及为何接续词化，明确了以下几点内容。

①随着前接要素的扩大化，“上（じょう）”的造语力随之增强，进而接尾辞化。与此同时，“上（じょう）”的意思也从表示空间具体位置、方向、范围等转变为表示抽象的方面、范围等义。其前接部分跨越形态层面而扩大至句法层面，出现“短语统括”现象，即接尾辞“上（じょう）”的前接部分包含前接结合要素和其连体修饰部分。

②“上（じょう）”与表示抽象事物的独立语素相结合时，“－上”一般作副词使用。但根据是否需要修饰成分，以及如需修饰成分，该修饰成分是否存在于上文中等条件，“－上”在功能上也可作接续助词、接续词使用。

③“上（じょう）”的前接要素本身不能表达完整意思时，需要修饰成分进行表达意思内容上的补充。该修饰成分出现在上文之中，“－上”单独位于句首或者主句句首使用时，在功能上与承前启后的接续词一致。这种功能的转移，起因于保留了原有词义的前接结合要素与“上（じょう）”所组成的“－上”对于其前后接续内容之间的意义关系有一定影响。当“－上”与后续内容一起对前接内容起到状况说明、信息补充的作用时，其与后续内容的连接更加紧密，产生类似于接续词的功能。

1 はじめに

語構成要素「上（じょう）」は結合要素の種類によって、以下のように名詞性語基（例(1)）、名詞性接尾辞（例（2））、副詞性接尾辞（例（3）（4）（5））として振る舞う。このような「上（じょう）」を伴う語（以下「―上」とする）は文中で名詞、副詞として、或いは文を越えて、接続助詞的に、接続詞的に機能する。本稿は接尾辞「上（じょう）」を後要素とする語「―上」を取り上げ、それが文中で或いは文を越えてどのように振る舞うか、どのようにそしてなぜ接続詞化するかについて記述し、分析する。

---

* 以接尾辞「上（じょう）」为构词要素的词的功能
―关于功能的转移和转移的条件―（张希西 ZHANG Xixi）

** 大阪大学文学研究科博士後期課程

（1）スタッフはビルの**屋上**に看板を取り付ける。[1]
（2）あの子は**戸籍上**で私の子になっている。
（3）風呂であまり垢を落とし過ぎると**美容上**よくない。
（4）イベントの開催を後援している**関係上**、社長もそのイベントに出席した。
（5）事件を起こしたのは親戚の子供だ。**立場上**、弁護に立ち入りづらい。

先行研究としては、「上（じょう）」の意味用法を取り上げる国立国語研究所（1985）、野村（1978）、秋元（1991,1994）があり、「上（じょう）」の副詞性接尾辞の性質と「―上」の副詞的用法と接続詞的な用法について指摘がある。しかし、副詞として振る舞う「―上」がどのような条件で接続助詞または接続詞的に振る舞うようになるかについて、説明する余地があり、また「―上」の接続詞化する原因が明らかではない。このような機能の移行と移行の条件及び原因に注目し、「上（じょう）」の前接部分の拡大と修飾部分の省略に関わると考えられ、具体的な例を挙げながら記述し、検討していく。

先行研究の紹介は 2 節で、「上（じょう）」の接尾辞化と前接要素の拡大については 3.1 節、「―上」の機能の移行と移行の条件については 3.2 節、「―上」が接続詞的な機能を果たすようになる原因の検討は 3.3 節で詳述する。そして、4 節で記述した内容をまとめる。

2 先行研究

「上（じょう）」の性質と意味用法を取り上げる先行研究は少なく、国立国語研究所（1985）、野村（1978）、秋元（1991,1994）などがあり、このうち、「―上」の副詞的用法のほか、接続詞的な用法について言及したのは秋元（1991,1994）のみである。

国立国語研究所（1985：54）では、接尾辞を「名詞性接尾辞」「動詞性接尾辞」「形容詞性接尾辞」「形容動詞性接尾辞」「副詞性接尾辞」と分けているが、「上」を副詞性接尾辞とし、例として「事実上」「形式上」「経験上」「手続き上」を挙げている。

野村（1978）では「地球上」の例を挙げ、「上（じょう）」を＜位置・順序＞を表す体言型語基としているが、「経済上」の「経済」のような抽象的な概念と結合する場合、「…に関する」という意味しか持たなくなり、相言型語基に近くなると述べている。

秋元（1991）では、「上（じょう）」は「海上」「車庫上」のように、前項の名詞が具体的な物の場合は位置関係や場所を示す意味となり、抽象度が増すに従って、「学術上」「指導上」にある「上（じょう）」のように、「…に関して」「…の面で」の意味となって

[1] 例（1)-(5）は「―上」の典型的な用法を示す作例であるが、収集した用例を基にしたものがある。

おり、結局、「…に関して」「…の面で」という意味も、「ある抽象的な概念という場所の上で」という意味にすぎず、つまり、「…に関して」「…の面で」などのような意味は具体的概念の延長線上にあるものと考えられるとされている[2]。また、文頭にくる「行きがかり上」「対抗上」「形式上」「便宜上」の四つの例を挙げ、接尾辞「上（じょう）」の意味はすでに希薄であり、前項の語と結合して先行の表現内容を受けて後続の表現を展開させる接続詞としての働きを持っており、研究する余地があると示唆的に指摘している[3]。

秋元（1994）は談話における接尾辞「上（じょう）」の機能について、書きことばにおいては、先行文（先行文脈）と後続文（後続文脈）との間を明確にするための接続詞が省かれることが多いが、その場合、「上（じょう）」の付く語は副詞としての機能のほかに接続詞としての機能を担うことになり、どちらの機能が優位に立つかは、「上（じょう）」と結合する語の抽象度の違いにより、特に段落頭に「上（じょう）」が付く語が来る場合は、その段落が意味上まとまりのある前後のいくつかの段落の中心的な内容を含むことになるとされている。また、「上（じょう）」は結合する語に後接し、それをぼかして表現し、書き手（話し手）が断定を避け、緩和させるような漠然化する働き[4]があり、その程度は「上（じょう）」と結合する語の抽象度に関係すると指摘しているが、抽象度の度合いについて、談話における「上（じょう）」の付く語にどの程度の接続詞的な機能があるかについて、更に調べて明らかにする必要があると述べている。

先行研究では「上（じょう）」の性質と意味用法について、特に秋元の考察では「上（じょう）」の形態的な分類による意味用法、「上（じょう）」を接尾辞とする「―上」の副詞としての機能、及び談話において接続詞としての機能を担うようになることについて説明している。しかし、副詞として振る舞う「―上」がどのような条件で接続助詞または接続詞的に振る舞うようになるかという機能の移行条件について、「―上」が接続詞化する原因について、明らかにしていないと言える。

以下、上記のことを解明するため、具体的に記述し、検討していく。

3 接尾辞「上（じょう）」を後要素とする語「―上」について

語構成要素「上（じょう）」は次のような使用例があり、前接する要素の性質と「―上」という語における「上（じょう）」の意味によって、以下のように分けられる[5]。

---

[2] 秋元（1991）23頁。
[3] 秋元（1991）26頁。
[4] 例えば、「事実」という語が百パーセント確実な場合にしか用いることができないのに対して、「事実上」という語は、書き手（話し手）がかなり確実だと判断した場合に用いることができる（秋元（1994）13頁）。
[5] 現段階では動詞として使用される「―上」は対象外とする。また、結合要素間の関係が透明的で語源に遡らなくて把握できるものに限定する。このため、「上京」「上申」「上告」「上昇」「向上」「返上」「北上」

A. ＜一語化の「―上」＞（一字漢語＋上）

語例[6]：屋上、頂上、階上、頭上、卓上、席上、地上、陸上、途上、海上、など

B. ＜具体的な事物を表す自立形態素＋上＞（二字以上漢語／外来語＋上）

語例：甲板上、舞台上、線路上、道路上、地球上、リング上、手形・小切手上、など

C. ＜抽象的な事柄を表す自立形態素＋上＞（二字以上漢語／和語＋上）

語例：表面上、美容上、仕事上、立場上、経験上、責任上、実際上、事実上、必要上、関係上、都合上、など

表１で示しているように、前接要素によって、「上（じょう）」と「―上」は異なる意味と性質を呈している。

表１　「上（じょう）」と「―上」の意味と性質

分類	前接要素の特徴	「上（じょう）」の性質	「―上」の性質	「上（じょう）」の意味
A	多くは具体的な事物を表す非自立形態素、一字漢語	名詞性語基	一語化の名詞	空間的な位置・範囲・部分を表す、または過程の意味が加わる
B	具体的な事物を表す自立形態素、二字以上漢語／外来語	名詞性接尾辞	名詞	空間的な位置・範囲・部分、抽象的な範囲を表す場合もある
C	抽象的な事柄を表す自立形態素、二字以上漢語／和語	副詞性接尾辞	副詞	抽象的な範囲、側面

このうち、接尾辞として振る舞うのがＢとＣにおける「上（じょう）」であり、これは結合する要素の多様化のみならず、「句の包摂」という現象とも関わり、その前接部分が形態的なレベルのみならず、語を越えて統語的なレベルまで拡大する。また、Ｃにおける「―上」は普通副詞として振る舞うが、統語的な環境などによって接続助詞的に、接続詞的に振る舞う場合があり、以下詳しく説明する。

3.1「上（じょう）」の接尾辞化と前接要素の拡大

Ａ種において、「上（じょう）」は「屋」「頂」「頭」「卓」「席」「地」のような一字漢語と共起するのに対し、Ｂにおける前接要素が自立的形態素であるとともに、語種、文字数と前接要素の数（複数の前接要素）も多くなり、Ａの場合より、前接要素が拡大していると考えられる。また、ＣはＡより、前接要素の語種、文字数などが多くなり、

などのような語は対象外とする。

[6] これらの語例は「新潮文庫の 100 冊」より収集した用例に含まれるものである。

また、B に比べて前接要素がより自由であるため、前接要素が更に拡大していると考えられる。このような拡大は形態的なレベルのみならず、語を越えて統語的なレベルまで及び、「本来、形態的な語形成レベルのものが、意味的に語を越えた、統語論的なレベルのものを包摂している」（森山（1986：22））という「句の包摂」現象が見られる。A に対し、B、特に C における「上（じょう）」は独自の意味が薄くなり、抽象的な範囲、側面のような意味が生み、前接要素の拡大に伴い、生産力が増すようになるため、接尾辞化していると言える。

（6）僕は乗降台からプラットフォームと反対側の**線路上**に押し飛ばされ、誰か女の人らしい柔かい体の上に被さった。僕の上にも重い人体が被さった。（黒い雨　井伏鱒二）
（7）父の詩は、すべて、おおらかな人間讃歌の調べに溢れていた。行助は一月に生れていたのに、父は詩で五月生れにしていた。作詩の**環境上**、そうしたのかもしれない。行助の裡にある父の像はさだかではないが、しかし、彼のなかでは父が生きていた。（冬の旅　立原正秋）
（8）座席の位置の**関係上**、城吉が先に車を降りる。誰も彼に言葉ひとつかけるではない。（楡家の人びと　北杜夫）

上記の例における接尾辞「上（じょう）」の前接部分は統語的な連体修飾成分にまで拡大している。連体修飾成分の「プラットフォームと反対側の」「作詩の」「座席の位置の」は「―上」全体ではなく、それぞれ「上（じょう）」の前接要素「線路」「環境」「関係」を修飾している。

3.2「―上」の機能の移行と移行の条件

前記のように、前接要素の性質によって「―上」は文中で名詞または副詞として振る舞うが、後者の場合、統語的及び構文的な環境によって、接続助詞的に、接続詞的に振る舞うことがある。

（9）O 型と A 型の両親から、AB 型という子供は絶対に生れないんだ。つまりだよ、登美子のおなかの子供はお前の子供じゃなかったんだ。これは**学問上**まちがいの無い事なんだよ。（青春の蹉跌　石川達三）
（9）’ O 型と A 型の両親から、AB 型という子供は絶対に生れないんだ。つまりだよ、登美子のおなかの子供はお前の子供じゃなかったんだ。**学問上**、これはまちがい

の無い事なんだよ。

「屋上」「海上」「地上」などのように、多様な格助詞と共起し文中で状況語として働く名詞に対し、「学問上」「美容上」「仕事上」「表面上」などは普通格助詞と共起せず述語の修飾語として働くことが多い。そのため、文中での位置が「屋上」などほどではないが、相対的に自由であり、例（9）と（9)' で示しているように、修飾がかかる部分の直前にくることも、文頭にくることもできる。また、述語は判断、評価などを表すことが多い。このような「―上」は普通連体修飾成分が前接しない。

（10）フレンドコーポレーションの本店所在地は河本の会社の一室にあり、実際の業務もここで行なっていた**関係上**、私は新年の挨拶も兼ねて河本の会社へ出向き、そこでゴルフ場の進行状況についての意見交換と報告を兼ねた会談を行なった。（真実の報酬　藤田敏彰　文芸社）

（11）親戚はどちらも少くて、わたしの方は村内にいる遠縁のもの二、三人だけ、珠子の方は東京から、珠子の従兄という人が来てくれただけでした。村の人もだいぶ招いたのですが、村長のほかは四、五人という淋しさでした。これはまあ、わたしたちの結婚に反対した**行きがかり上**、来づらいからでもあったのでしょう。（エディプスの恋人　筒井康隆）

例（10）と例（11）で示しているような連体修飾成分の前接が必要となる「―上」もあり、従属節の節末に来て、節と節を結び付け、その間の意味関係を示すような接続助詞の性格を帯びていると思われる。また、このような修飾成分が直前ではなく、前文脈にある場合がある。このとき、「行きがかり上」は前文脈の内容が必要となり、前文脈を受け、後文を継ぐという接続詞のような役割を果たしている。「事実上」「責任上」「立場上」などのような「―上」もこのような用法がある。

（12）なんでもいいから、喉をしめしたい。このままでは、体中の血が死んでしまう。けっきょくは、苦しみの種をまき、あとで後悔することを百も承知していながら、もう抗うことはできなかった。栓をひきぬき、瓶の口を歯にぶち当てながら、ラッパ飲みにする。それでも舌は、まだ忠実な番犬だった。不意の闖入者におどろいて、あばれだした。むせかえった。すり傷にオキシフルをふりかけたようなものである。そのくせ、三口めの誘惑にも、ついにうちかてなかった。とんだ祝い酒もあったものである……**行きがかり上**、女にもすすめてみた。むろん女は、

強く断わった。まるで毒を強いられでもしたような、大げさな拒みかただった。あんのじょう、胃に落ちこんだアルコールは、すぐにピンポン玉のように、耳のへんまではね返り、そこで蜂の羽音をたてはじめる。皮膚が、豚皮のように、こわばりはじめる。（砂の女　安部公房）

このように、修飾成分が必要となるかどうか、必要な場合、修飾成分が前文または前文脈にあるかどうか、などの条件によって、副詞のように使用される「―上」は接続助詞的に、接続詞的に振る舞うことがある。

表２「上（じょう）」と「―上」の意味と機能

使用例	「―上」の機能	「―上」の統語的、構文的特徴	
教育上、表面上、生活上、仕事上、責任上、立場上、関係上、事実上、行きがかり上、など	副詞のように振る舞う	普通はゼロ格で使用される。「句の包摂」現象がある。	修飾成分が不必要であり、単文で使用されることが多く、述語の前または文頭にくる。
	接続助詞のように振る舞う		修飾成分が必要であり、複文で使用され、従属節の節末にくる。
	接続詞のように振る舞う		修飾成分が必要で普通前文または前文脈にある。複文で使用され、文頭にくる。

前述した表１では、A、B、C の三類について、意味と性質などを説明したが、表２はC 類の更なる展開について、「―上」の多様な機能を示すものである。この類にある「―上」は副詞として使用されるほか、例（7）（8）で示されるように、修飾成分が前接しながらも、文において機能的には副詞のように、また例（10）と例（12）で示されるように、接続助詞または接続詞のように使用されることがある。一つの語例であっても、例えば、「立場上」は場合によって、副詞のようにも、接続助詞または接続詞のようにも振る舞う。この語例の詳細は次節で述べる。

では、なぜ「―上」が接続詞的な機能を果たすようになるか、その原因について、次の 3.3 節で検討する。

3.3「―上」が接続詞的な機能を果たすようになる条件と原因

抽象的な事柄を表す自立形態素と結合する「上（じょう）」には次のようなものがあるが、前接要素の性質によって、文中であるいは文を越えて、異なる振る舞いをする。上述した内容から分かるように、これらの語の全てが副詞として以外、接続詞的に振る舞うことがあるわけではなく、一部のみであり、例えば、「事実上」「実際上」「立場上」

「行きがかり上」「責任上」などが挙げられる。

想起閾上、表面上、戸籍上、衛生上、美容上、職務上、経験上、組織上、公務上、商売上、生活上、歴史上、法律上、法規上、財政上、証券上、宗教上、営業上、経営上、教育上、学問上、医学上、生物学上、心理学上、作戦上、技術上、責任上、企業戦略上、会社運営上、公安保持上、看護並治療上、体面上、体裁上、風体上、環境上、捜査上、整理上、登録上、想像上、性質上、実際上、事実上、名目上、必要上、関係上、都合上、仕事上、手続上、立場上、行きがかり上

接続詞のように振る舞う「―上」は前後の文または文脈を受け継ぐ機能を果たすため、次のように分けて見ることができると考えられる。

【受け】：前の文または文脈を受ける可能性と必要性

【継ぐ】：後の文または文脈を継ぐ展開機能

副詞として使用される「―上」も、接続助詞的に、接続詞的に振る舞う「―上」も、それのみで文または叙述内容を終えることができず、後続内容が必要であることは 3.2 で挙げている例から分かる。また、「上（じょう）」にある側面、範囲の意味が潜んでいるため、その側面・範囲という角度から何かについて語ることができ、「―上」はある事態を切り出すような機能があり、これで後続内容を展開し、【継ぐ】機能を果たす。これに対し、前者の【受け】に関する更なる検討が要ると思われる。どのような「―上」において、修飾成分が必要となるか、また、どのような場合、修飾成分が前文または前文脈にあるかについて、以下の二点から検討する。

①修飾部分の必要性

②修飾部分の位置

「―上」は、修飾部分が必要となり、且つそれが前文または前文脈にあり、単独で文頭に使用されるとき、接続詞的に振る舞うと考えられる。

上記のリストにおいて、「想起閾上」「戸籍上」「衛生上」「美容上」「商売上」「教育上」「宗教上」「医学上」「生物学上」「心理学上」のような語では、その前接要素である語自身で、ある抽象的な事物または事態を表すことができ、修飾部分が必要ではない。「企業戦略上」「会社運営上」「公安保持上」のような語では、複数の前接要素が合わせてある物事を表し、修飾部分も必要ではない。これらに対し、「事実上」「実際上」「立場上」「行きがかり上」「関係上」「必要上」「都合上」「責任上」などは、前接要素自身で完全な内容を表すことができず、修飾部分が必要となるものである。接続助詞と接続詞を区別せず、接続表現全般を取り扱う立場もあるが、「修飾部分の位置」による違いを強調するために、本稿は「―上」を接続助詞的用法と接続詞的用法に区別する。それぞれの

典型例として後述する「関係上」と「事実上」があり、前者は修飾部分が必要であっても、その位置が常に直前であり、「関係上」に前接して出現するのに対し、後者はその意味を補足する内容がよく前文脈にある。また、「立場上」のような両方の用法を持つものもある[7]。当然、修飾部分が必要となるものとそうではないものの間にはっきりとなる境界線がなく、「(子供の) 教育上」のような修飾部分が必要ではないがあってもいいというものもある。

「現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言)」で確認した結果、「関係上」は 170 例抽出された。そのうち、ノ格または修飾節などによって修飾されず、あるいは「労働関係上」のようにほかの要素と合わせて出現せず、単独で現れているものは以下の 1 例のみであった。

(13)「山陽新報」(8・十・十) によると、「帯江村と豊洲村の両村合併問題は数年前より起り居れるも中々協議纏まらざりし」という。そのわけは「同村役場を中央に置くとしても東西里程約一里に余り町民の不便尠からず、従つて学校は豊洲村大字西田・帯江村大字五ヶ市の二ヶ所に設置され居れるが、高等科を帯江校へ併置するとせば豊洲村よりの児童の通学不便にて、**関係上**村民意志の疎通を欠き、動もすれば学校区域別の衝突を来たするを以て忍び兼ね、一つは帯江村・豊洲村は用水の関係上に就きて折合上宜しからず」という状況であったからで、「両村合併は不可能なるもの、如しと」との観測も伝えられている。(坂本忠次・早瀬武　新修倉敷市史　倉敷市)[8]

この例で「関係上」は単独で使用されているが、ここにおける「関係」は「美容」などのようにそれ自身である事態を表すのではなく、点線で記している部分による内容補足が必要である。そのため、修飾部分が必要でありながら前文または前文脈にあり、前後文脈を受け継ぐように見えるが、限定されている用法なので、全体から見れば「関係上」は内容補足部分が直前にきて出現するのが普通であり、接続詞的に振る舞っているとは言えないと思われる。

---

[7] 紙幅のため、これらすべての用例を挙げることができず、その振る舞いについて、まとめて説明する。副詞として以外、「事実上」と「実際上」は「……、—上、……」または「……。—上、……」のようなパターンで接続詞的に使用されることが多いのに対し、「関係上」「必要上」「都合上」は「……—上、……」のように修飾部分が前接して接続助詞のように使用されることが多い。また、「立場上」「行きがかり上」はこの両方の用法がある。そして、「責任上」は副詞のように使用されることが多いが、接続詞的用法も少数ある。

[8] (作者　作品名　出版社／出版機構) のように出典を記しているものは「現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言)」で収集した用例であり、(作者　作品名) のように記しているものは「新潮文庫の 100 冊」の用例である。

これに対し、「事実上」は接続詞の性格が強いと考えられる。文中で使用されることもあるが、文頭または主節文頭で使用されることが多い。

(14) 国内支配を確立したナチスは，千九百三十三年秋，軍備平等権が認められないことを理由に国際連盟から脱退し，三十五年には住民投票によってザール地方を編入した。同年，ナチスが徴兵制の復活と再軍備を宣言すると，イギリス・フランス・イタリアは抗議した。しかしまもなくイギリスはドイツと海軍協定を結んで，イギリスの三十五パーセントの海軍力保有をドイツに認め，**事実上**再軍備を追認した。千九百三十六年，ドイツは仏ソ相互援助条約調印を理由にロカルノ条約を破棄して，ラインラントに軍を進駐させ，ヴェルサイユ体制の破壊をすすめた。（木村靖二・佐藤次高・岸本美緒ほか　詳説世界史　山川出版社）

(15) （前略）これは、監査役の選任・解任議案が、通常、取締役会によって総会に提出されるため、取締役会の支配が及ぶおそれがあることに鑑みたものである。この場合、監査役が本条の規定に基づいて意見を述べることができるのはもちろん、任期が満了する監査役または解任決議の対象となっている監査役が、自分が再任されないこと、または解任されることについても意見を述べることができる。**事実上**、強制されて辞任することもありうるので辞任の場合にも意見陳述権が認められている。（弥永真生　会社法　弘文堂）

この二例では、「事実」の内容を補足する点線部分は前文または前文脈にあり、「事実上」はその内容を受け、波線で示している後続内容を継ぐ役割を果たし、「つまり」「即ち」のような接続詞と似ている。この二例では、内容補足部分が多くて長いため、修飾節として前接せず、前文または前文脈に出現するように見えるが、このような使用パターンは「事実上」の先行内容と後続内容の意味的関係によるものだと考えられる。「事実上」は後続内容とともに、先行内容に対する状況説明、情報付加の働きをする。この点について、接続詞のようにも、接続助詞のようにも振る舞うことがある「立場上」の例を挙げ、先行内容と後続内容の意味的関係による「―上」の使用パターンの違いを説明する。

(16) このように周囲に少しでもうつ病に対して理解ある人を広めていくことは、実はかなり重要な社会に対する影響力を与えることにもなるのです。Q まだあまり回復していないのですが、どうしても会社を休むことができません。どうしたらいいでしょうか。A ここがポイント・本来なら、うつ病の治療には仕事を

忘れて休むのが一番です。**立場上**なかなか休めないときは、必要最低限のことだけをして、体力的、精神的な負担を軽減してください。（樋口輝彦　うつ病法研）

（17）光があたっている。道の表面を薄くおおっている白い砂も乾ききっている。後ろに人の気配がし、二人は同時にふりかえった。日傘代わりに黒い雨傘をさした痩せた男が立っていた。（中略）「勲、わしはな、工事現場の交通整理をしている**立場上**、賛成せざるをえないが、ずっと苦しんでいるんだ。わかってくれよな。わしの立場があるんだ。だが、トゥジ（女房）やウヤ（親）には反対するように話しておくよ」「賛成をして、苦しむいわれは何もないですよ。私も賛成しています」自治会長は父を制するようにすぐ言った。（又吉栄喜　陸蟹たちの行進　新潮社）

例（16）では、「立場上」は接続詞のように振る舞うが、波線で示される後続内容とともに、点線で示される先行内容に対して譲歩と逆接の意味を帯びた状況説明、情報付加の働きをする。これに対し、例（17）では、「立場上」は先行内容とともに後続内容で示される事態の原因を表し、両者は原因と結果のような意味的関係を成していると考えられる。このように、上記の2例において、「立場上」が受ける先行内容とそれに継ぐ後続内容の意味的関係が違う。

「―上」は前接要素である名詞の意味が残っており、意味的にそれに左右されやすいと考えられる。「上（じょう）」が「事実」「実際」などと結合し、構成した「事実上」「実際上」などは後続内容とともに先行内容に対する状況説明、情報付加の働きをするのに対し、「上（じょう）」が「関係」「必要」などと結合し、構成した「関係上」「必要上」などは先行内容とともに後続内容に対する原因・理由説明の働きをすると考えられる。前者は後続内容との緊密度がより高く、接続詞のように、後者は先行内容との緊密度がより高く、接続助詞のように振る舞うと考えられる。「立場」と「上（じょう）」が結合した「立場上」は前後文脈によって、その先行内容と後続内容の意味的関係が上記の両方になり得るため、接続詞のようにも、接続助詞のようにも振る舞うことができる[9]。

このように、「―上」は接続詞的に振る舞うには以下のような原因と条件があり、両方が揃ったうえで、「―上」が接続詞化する。ただし、「事実上」「立場上」「行きがかり上」などにはまだ前接要素である名詞の意味が残っているため、接続詞化するが、完全

[9] 前接要素である名詞の意味が残っており、「―上」の意味と用法はそれに左右されやすいが、どの程度左右されるか、また前接要素である名詞の語彙的な意味とどのように関わるか、などについて今後の課題とし、引き続き検討する。

に接続詞になっているのではなく、接続詞的に振る舞うと言えよう。

①「―上」が接続詞化する条件：前接要素自身で完全な意味を表すことができず、その意味内容を補足するための修飾部分が必要となる。また、修飾部分が前文または前文脈にあり、「―上」は単独で使用され、先行内容と後続内容の間で受け継ぐ機能を果たす。

②「―上」が接続詞化する原因：語彙的な意味が残っている前接要素と「上（じょう）」が結合して構成した「―上」は先行内容と後続内容の意味的関係に影響を与える。「―上」は後続内容とともに先行内容に対する状況説明、情報付加の働きをする場合、後続内容との緊密度がより高く、接続詞のように振る舞うと考えられる。

これで、「―上」は前後文脈の内容を受け継ぐような接続詞の性格を帯びるようになる。

4 おわりに

本稿は接尾辞「上（じょう）」を後要素とする語「―上」を取り上げ、それが文中であるいは文を越えてどのように振る舞うか、またなぜ接続詞化するかについて記述し、以下の点を明らかにした。

「上（じょう）」は前接要素の拡大を伴って生産力を増し、接尾辞化し、抽象的な側面・範囲という意味を表すようになる。その前接部分は形態的なレベルのみならず、語を越えて統語的なレベルまで拡大し、接尾辞「上（じょう）」が前接要素とその修飾部分を包み込む「句の包摂」現象が見られる。

「上（じょう）」が抽象的な事柄を表す自立形態素と結合する場合、副詞のように振る舞うことが多いが、修飾成分が必要となるかどうか、必要な場合、修飾成分が前文または前文脈にあるかどうか、などの条件によって、副詞のように使用される「―上」は接続助詞的に、接続詞的に機能することがある。

「上（じょう）」の前接要素自身で完全な意味を表すことができない場合、その意味内容を補足するための修飾部分が必要となる。この修飾部分が前文または前文脈にあり、「―上」は単独で使用され、先行内容と後続内容の間で受け継ぐ機能を果たす。このような機能の移行は、語彙的な意味が残っている前接要素と「上（じょう）」が結合して構成した「―上」は先行内容と後続内容の意味的関係に影響を与えることに起因すると考えられる。「―上」は後続内容とともに先行内容に対する状況説明、情報付加の働きをする場合、後続内容との緊密度がより高く、接続詞のように振る舞うと考えられる。

なお、本稿の内容と関わる「句の包摂」現象は「―上」のみならず、「―下」「―後」「―中」「―内」などの場合にもあると考えられるが、別稿に譲り、今後の課題とする。

参考文献

秋元美晴（1991）「漢語系接尾辞「―上」について」『緑岡詞林』15．19-27 頁．青山学院日文院生の会.

――――（1994）「談話における漢語系接尾辞「―上」の機能について」『恵泉女学園大学人文学部紀要』6．1-16 頁．恵泉女学園大学人文学部.

国立国語研究所（1985）『語彙の研究と教育（下）』大蔵省印刷局.

野村雅昭（1978）「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究』9．102-138 頁．国立国語研究所.

森山卓郎（1986）「接辞と構文」『日本語学』3．19-27 頁．明治書院.

用例出典

CD-ROM 版　新潮文庫の 100 冊（本文で用例を引用した作品）:『エディプスの恋人』筒井康隆、『冬の旅』立原正秋、『黒い雨』井伏鱒二、『青春の蹉跌』石川達三、『人民は弱し官吏は強し』星新一、『砂の女』安部公房、『楡家の人びと』北杜夫（訳文を除き、1950 年以降出版された作品に限定した。）

現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）国立国語研究所.